

目次

第二篇 資本の回転 三九

第七章 回転時間と回転数 三九

第八章 固定資本と流動資本 四〇

第一節 形態的区别 四〇

第二節 固定資本の、構成諸部分・補填・修理・蓄積 四三

第九章 前貸資本の総回転。回転循環 四六

第一〇章 固定資本と流動資本とにかんする諸学説。

重農主義者たちとアダム・スミス 四七

第十一章 固定資本と流動資本とにかんする諸学説。リカードウ 五〇

第十二章 労働期間 五〇

第十三章 生産時間 五六

第四章	通流時間	三九三
第五章	資本前貸しの大きさにおよぼす回転時間の影響	四〇六
第一節	労働期間が流通期間に等しい場合	四二〇
第二節	労働期間が流通期間より長い場合	四二七
第三節	労働期間が通流期間より短い場合	四三五
第四節	結 論	四四一
第五節	価格変動の影響	四五一
第十六章	可変資本の回転	四六五
第一節	剰余価値の年率	四六五
第二節	個別可変資本の回転	四六七
第三節	社会的に考察した可変資本の回転	四九四
第十七章	剰余価値の流通	五〇四
第一節	単純再生産	五一三
第二節	蓄積と拡大再生産	五四五

目次

第二卷分冊目次

第一分冊

第二部 資本の流通過程

第一篇 資本の諸変態とそれらの循環

第一章 貨幣資本の循環

第二章 生産資本の循環

第三章 商品資本の循環

第四章 循環過程の三つの図式

第五章 流通時間

第六章 流通費

第二分冊

第二篇 資本の回転

第七章 回転時間と回転数

第八章 固定資本と流動資本

第九章 前貸資本の総回転。回転循環

第一〇章 固定資本と流動資本とにかんする諸

学説。重農主義者たちとアダム・ス

ミス

第十一章 固定資本と流動資本とにかんする諸

学説。リカードウ

第十二章 労働期間

第十三章 生産時間

第十四章 流通時間

第十五章 資本前貸しの大きさにおよぼす回転

時間の影響

第十六章 可変資本の回転

第十七章 剰余価値の流通

第三分冊

第三篇 社会的総資本の再生産と流通

第一八章 緒論

第一九章 対象についての従来の諸叙述

第二〇章 単純再生産

第二十一章 蓄積と拡大再生産

第二篇 資本の回転

第七章 回転時間と回転数

すでに見たように、ある与えられた資本の総流通時間は、その資本の通流時間と生産時間との合計に等しい。それは、一定の形態での資本価値の前貸しの瞬間から、過程進行中の資本価値の同じ形態での復帰までの期間、である。

*〔この「総流通時間」の「流通」は、生産過程から区別された、もっぱら流通部面で行なわれる資本の運動ではなく、資本の諸変態の循環としての、したがってまた資本の諸形態の再生産の過程としての「流通過程」をさしている。マルクスが第二部で扱うのは、この「それ自体同時に再生産過程である流通過程」(『剰余価値学説史』、邦訳『全集』、第二六卷、第二分冊、六九三ページ。『資本論草稿集』6、大月書店、七一九ページ)である。他の箇所ではマルクスは「総流通時間」に代えて「回転時間」としている(本訳書、二四三、三六五、三九三、四一二ページなど)。なお、フランス語版、イタリア語版、スペイン語カル

タゴ版などは、この「流通」を「循環」に替え、英語版、ロシア語版、ブルガリア語版、ハンガリー語版、スペイン語シグロXXI版などは、この個所を「回転時間」になおしてしまっている」

資本主義的生産の規定的目的は、つねに、前貸価値の増殖であり、この価値が、その自立的形態すなわち貨幣形態で前貸しされるか、それとも、商品で前貸しされ、その結果、その価値形態が前貸しされた商品の価格のうちに観念的な自立性をもつにすぎないかに、かわりはない。両方の場合とも、この資本価値は、その循環中にさまざまな実存形態を経ていく。この資本価値の自己との同一性は、資本家の帳簿で、または計算貨幣の形態で、確認される。

$G \dots G'$ という形態を見ても、 $P \dots P$ という形態を見ても、両方の形態が、(一) 前貸価値は資本価値として機能し、自己を増殖したということ、(二) 前貸価値はその過程を経過したのちに、過程を開始したさいの形態に復帰したということ、を含んでいる。前貸価値 G の増殖と、また同時にこの形態(貨幣形態)への資本の復帰とは、 $G \dots G'$ では、手に取るように明らかである。しかし、同じことは第二の形態でも生じる。というのは、 P という出発点は、生産諸要素の、すなわち与えられた価値をもつ諸商品の現存だからである。この形態は、この価値の増殖を含み (W と G')、また最初の形態への復帰を含む。というのは、第二の P では、前貸価値が、ふたたび最初に前貸しされたときの生産諸要素の形態をとるからである。

(155) すでに見たように、「生産が資本主義的形態をもつならば、再生産もそうである。資本主義的生産様式のもとでは、労働過程が価値増殖過程のための一手段としてのみ現われるのと同じように、再生

産も、前貸価値を資本、すなわち自己増殖する価値として再生産するための一手段としてのみ現われる」(第一部、第二章、五八八ページ〔本訳書、第一巻、九七一ページ〕)。

形態Ⅰ $G::G'$ 、Ⅱ $P::P$ 、Ⅲ $W::W'$ という三つの形態は、形態Ⅱ ($P::P$) では過程の更新すなわち再生産過程が現実的なものとして表現されるが、形態Ⅰでは可能性としてのみ表現される、ということによって区別される。しかし、この両形態が形態Ⅲと区別されるのは、前貸資本価値が——貨幣としてであれ素材的生産諸要素の姿態であれ——出発点となっており、それゆえまた復帰点ともなっているからである。 $G::G'$ では、復帰は $G::G'$ である。過程が同じ規模で更新されるとすれば、 G はふたたび出発点となるのに g は過程にはいり込まず、 G は資本として増殖しそれゆえ剰余価値 g を生み出しはしたがそれを自己から突き放した、ということをも g は示すにすぎない。形態Ⅱ $P::P$ では、生産諸要素 P の形態で前貸された資本価値が、同じように出発点をなす。この形態は、この資本価値の増殖を含む。単純再生産が行なわれる場合、同じ資本価値が同じ形態Ⅱでその過程を新たに開始する。蓄積が行なわれる場合、 P' (価値の大きさからすれば G' に等しく、また W' に等しい) が、増大した資本価値としていまや過程を開始する。しかし、この過程は、以前よりも大きい資本価値をもつてであるとはいえ、ふたたび最初の形態での前貸資本価値で始まる。これにたいして形態Ⅲでは、資本価値は前貸資本価値として過程を開始するのではなく、すでに増殖された資本価値として、諸商品の形態にある富の総体として、過程を開始するのであり、前貸資本価値はこの富の一部分にすぎない。この最後の形態 (Ⅲ) は、個別諸資本の運動が社会的総資本の運動との連関において

把握される第三篇にとって重要である。しかしそれ(Ⅲ)は、資本の回転——これは、貨幣の形態であれ商品の形態であれ、つねに資本価値の前貸しで始まり、またつねに、循環する資本価値の、それが前貸しされたさいの形態での復帰を条件づける——のためには、利用しえない。循環ⅠとⅡとのうち、剰余価値形成への回転の影響が主として注目される限りでは前者を、生産物形成への回転の影響が主として注目される限りでは後者を、しっかりつかむべきである。

(156)

経済学者たちは、循環のさまざまな形態を区別しもしなかったし、資本の回転との関連でそれらの形態をべつべつに考察することもしなかった。普通の場合は、形態 $G \rightarrow G'$ がとりあげられる。なぜなら、この形態は個々の資本家を支配しており、資本家が計算するさいに、計算貨幣の姿態をとるにすぎない貨幣が出发点となる場合でも、この形態は資本家の役に立つからである。他の経済学者たちは、生産諸要素の形態での支出から出発して回収が行なわれるまで(「をたどるの」)であるが、その場合、商品であるか貨幣であるか、回収の形態についてはまったく一言もふれてはいない。たとえば——

「経済循環……すなわち、支出がなされるときから回収が行なわれるまでの生産の全経路。農業では播種期がその始まりで収穫がその終わりである」(S・P・ニューマン『経済学要論』、アンドウヴァーおよびニューヨーク(一八三五年)、八一ページ)。

他の経済学者たちはWから始める(形態Ⅲ)——

「業界は、環状に循環しているものとみなされ、これをわれわれは経済循環と呼ぶことにしたい。ここでは、事業がつきつきと取り引きを遂行してそれが出発した点にまた到達するたびに、一循環を

(157)

完了する。始まりは、資本家が自分の資本を回収するための収入を得た時点からとすることができる。この時点から、資本家は新たに労働者たちを雇い入れ、彼らの生計を、またはむしろ生計を手に入れる力を、労賃として彼らに分配し、彼の販売する物品を完成品の形で労働者たちから受け取り、この物品を市場に持ち出し、そこで商品売り、その売上金でこの期間の彼の全出資を回収することによって、この一連の運動の循環を終結させる」(Th・チャーマズ『経済学について』、第二版、グラスゴウ、一八三二年、八五ページ)。

個別資本家が任意の生産部門で投下する総資本価値がその運動の循環を経過し終えると、この資本価値はふたたびその始めの形態にあり、また同じ過程を反復することができる。価値が資本価値として自己を永遠化し増殖するには、この資本価値は同じ過程を反復しなくてはならない。個々の循環は、資本の生活においては、つねに反復される一部分すなわち一時期をなすにすぎない。G::G'という時期が終われば、資本はふたたび貨幣資本——資本の再生産過程または価値増殖過程がそのなかに含まれる形態諸転化の系列を新たに経ていく貨幣資本——の形態にある。P::Pという時期の終わりには、資本はふたたび、更新される資本循環の前提をなす生産諸要素の形態にある。資本の循環は、孤立した経過としてでなく周期的な過程として規定されるとき、資本の回転と呼ばれる。この回転の持続期間は、資本の生産時間と流通時間との合計によって与えられる。この総時間は、資本の回転時間をなす。それゆえ、これによって総資本価値の一循環期間と次の循環期間との間隔がはかられる。すなわち資本の生活過程における周期性、あるいは言い換えれば、同じ資本価値の増殖過程または生産過程

の更新、反復の時間をはかられる。

個人的な出来事のため個々の資本の回転時間を加速したり短縮^{*}したりする場合を別とすれば、諸資本の投下部面の違いに応じて資本の回転時間はそれぞれ異なる。

^{*}（イタリア語版は、「減速」の書き誤りであろうとしている）

労働日が労働力の機能の自然的な度量単位をなすように、過程進行中の資本の回転の自然的な度量単位は一年である。この度量単位の自然的基礎は、資本主義的生産の母国である温帯のもっとも重要な土地果実が年々の生産物である、ということにある。

回転時間の度量単位としての一年を U 、一定の資本の回転時間を u 、その資本の回転数を n とすれば、 $n = \frac{U}{u}$ である。したがって、回転時間 u がたとえば三ヵ月とすれば、 $n = \frac{12}{3} = 4$ である。この資本は一年に四つの回転を遂行する、または四回転する。 u が一ヵ月ならば、 $n = \frac{12}{1} = 12$ であり、換言すれば、この資本は一年間にその回転時間の $\frac{2}{3}$ を経過するにすぎない。資本の回転時間が数年におよぶとすれば、それは一年の倍数で計算される。

資本家にとっては、彼の資本の回転時間は、自分の資本を増殖してもとの姿で回収するために前貸ししておかなければならない時間である。

生産過程および価値増殖過程におよぼす回転の影響を詳しく研究するまえに、われわれは、流通過程から生じ資本に付着して資本の回転の形態に影響を与える二つの新たな形態を考察しなければならぬ。

第八章 固定資本と流動資本

第一節 形態的區別

第一部、第六章で見たように（本訳書、第一卷、三四六ページ参照）、不変資本の一部分は、この不変資本の寄与によつて形成される生産物にたいして、不変資本が生産過程にはいり込むさいの特定の使用形態を保持する。したがつて、不変資本のこの一部分は、期間の長短はあるが絶えず反復される労働過程において、絶えず同じ諸機能を繰り返す。たとえば、労働用建物、機械など、要するにわれわれが労働諸手段という名称のもとに総括しているものはすべてそうである。不変資本のこの部分は、それ自身の使用価値とともにそれ自身の交換価値を失うのに比例して、生産物に価値を引き渡す。この価値の引き渡し、すなわち、そのような生産手段の価値がその協力によつて形成される生産物にこのように移行することは、平均計算によつて規定される。この移行は、生産手段が生産過程にはいり込む瞬間から、それがまったく摩滅し死滅して、同種の新品によつて補填または再生産されなければならない瞬間にいたるまでの、この生産手段の機能の平均的持続時間によつてはかられる。

したがつて、不変資本のこの部分——本来の労働諸手段——の独自の点は次のとおりである——資本の一部分は、不変資本すなわち生産諸手段の形態で前貸しされているが、この生産諸手段は、

(159)

いまや、それらが労働過程にはいり込むときの自立的使用姿態が続くあいだは、労働過程の諸要因として機能する。完成生産物、したがってまた生産物に転化された限りでの生産物形成者（形成諸要因）は、生産過程から突き放され、商品として生産部面から流通部面へ移行する。それにたいして、労働諸手段は、ひとたび生産部面にはいり込んだあとは、決してそこを去らない。それらの機能がそれらを生産部面にしっかりと縛りつける。前貸資本価値の一部分は、過程内における労働諸手段の機能によつて規定されるこの形態に固定される。労働手段が機能するにつれ、それゆえまた労働手段が摩滅するにつれて、労働手段の価値の一部分は生産物に移っていくが、他の部分は労働手段に、それゆえ生産過程に固定されたままである。このように固定された価値はつねに減少し、ついに労働手段が役に立たなくなり、そのため、労働手段の価値も、一連のつねに反復される労働過程から生まれる多量の生産物に長かれ短かれの期間のうちに配分されてしまう。しかし、労働手段がまだ労働手段として有効であり、したがって同種の新品によつて補填されなくてもよいあいだは、つねに不変資本価値（の一部分）は労働手段に固定されたままであり、他方、最初に労働手段に固定された価値の他の部分は、生産物に移行し、それゆえ商品在庫の構成部分として流通する。労働手段が長もちすればするほど、その摩滅がゆっくりであればあるほど、それだけ長く不変資本価値はこの使用形態に固定されたままである。しかし、労働手段の耐久度がどのようであろうとも、労働手段が価値を引き渡す比率は、つねにその総機能時間に反比例する。二つの機械が同じ価値をもっていて、一方は五年で、他方は一〇年で摩滅するとすれば、前者は同じ期間内に後者の二倍ものの価値を引き渡す。

(160)

資本価値のうち労働手段に固定されたこの部分は、他のどの部分ともまったく同じように流通する。すでに一般的に見たように、資本価値全体が恒常的な流通のうちにあり、それゆえこの意味ではすべての資本が流通しつつある資本である。しかし、ここで考察される資本部分の流通は独自のものである。まず第一に、この部分は、その使用形態で流通するのではなく、ただその価値だけが流通するのであり、しかも、その価値がこの資本部分（労働手段）から生産物に——商品として流通する生産物に——移行するのに応じて、徐々に、少しずつ流通する。労働手段の全機能期間を通じて、その価値の一部分は、その助力によって生産される諸商品にたいして自立的に、つねに労働手段に固定されたままである。この独自性によって、不変資本のこの部分は、固定資本という形態を受け取る。これにたいし、生産過程に前貸しされた資本のうちの他の素材的構成諸部分は、すべて、それと対照的に、流動資本を形成する。

*（エンゲルスは「流動資本または流動性の（Circulating）資本」と書き加えている。マルクスが後者の言葉を他の個所で同意義に使用しているからであろう。スペイン語版の訳注による）

生産諸手段の一部分——蒸気機関によって消費される石炭のように、労働諸手段そのものによって機能中に消費される補助材料、または灯火用ガスなどのように、ただ工程を支えるだけの補助材料——は、素材的には生産物にはいり込まない。その価値が生産物価値の一部分を形成するだけである。生産物は、それ自身の流通のなかで補助材料の価値を流通させる。このことは、補助材料にも固定資本にも、共通である。しかし、補助材料は、どの労働過程にはいり込んでも、そこで全部消費され、

したがって新たな労働過程ごとに同種の新品によって全部補填されなければならない。補助材料は、その機能中、自立的使用姿態を保ち続けない。したがってまた補助材料の機能中、資本価値のどの部分も、補助材料のものと使用姿態——補助材料の現物形態——に固定されてはいない。補助材料のこの部分は、素材的に生産物にはいり込むのではなく、その価値に依拠して価値部分として生産物価値のなかにはいり込むにすぎないという事情、および——これに連関することであるが——この材料の機能は生産部面の内部にしっかりと縛りつけられているという事情が、ラムジーのような経済学者たちを迷わせて（固定資本と不変資本とを混同すると同時に）固定資本というカテゴリーを補助材料に適用させた*。

*『剰余価値学説史』、邦訳『全集』、第二六卷、第三分冊、四二七—四三〇ページ、『資本論草稿集』8、大月書店、三八八—三九〇ページ参照。マルクスはラムジーを古典派経済学の最後の代表者の一人とみなしていた。なお、ドイツ語ヴェルケ版およびそれによる邦訳諸版の指示ページは誤りと思われる。

生産諸手段のうち、素材的に生産物にはいり込む部分、すなわち原料などは、このことによって一部分はのちに嗜好品として個人的消費にはいり込みうる諸形態を受け取る。固定資本の素材的な担い手である本来の労働諸手段は、生産的にのみ消費され、個人的消費にはいり込むことはできない。なぜなら、それらは、その助けでつくられる生産物または使用価値にはいり込まず、それらが完全に摩滅するまで、むしろ生産物にたいして自立的姿態を保ち続けるからである。輸送諸手段は例外である。輸送諸手段が、生産的機能を果たすあいだに——すなわち生産部面にとどまっているあいだに

——生み出す有用効果、すなわち場所変更は、同時に、たとえば旅行者の個人的消費にはいり込む。彼はこの場合にも、その使用にたいして支払うのであり、それは、他の消費諸手段の使用にたいして支払うのと同じである。すでに見たように（本訳書、第一巻、三二一ページ参照）、たとえば化学工業では、原料と補助材料とは互いに入りまじって（その区別は）あいまいになる。労働諸手段と補助材料と原料（との区別）もそうである。たとえば農業では、土地改良に使用された諸素材は、一部は生産物形成者として農作物にはいり込む。他面では、それらの素材の作用は、かなり長い期間、たとえば四—五年間に配分される。こうしてそれらの素材の一部分は素材的に生産物にはいり込み、それと同時にまたその価値を生産物に移転するが、他の部分はもとの使用形態にとどまってその価値をも固定させる。この部分は生産諸手段として存続し、それゆえ固定資本の形態を受け取る。役畜としては牛は固定資本である。食用にされてしまえば、牛は労働手段としては機能せず、したがってまた固定資本としては機能しない。

(161)
生産諸手段に投下された資本価値の一部分に固定資本の性格を与えるように規定するものは、もっぱらこの価値が流通する独自の様式のうちにある。この独自の流通様式は、労働手段がその価値を生産物に引き渡す——または価値形成者として生産過程の中にふるまう——独自の様式から生じる。そして後者の様式そのものはまた、労働過程における労働諸手段の機能の特殊な仕方から生じる。

だれもが知っているように、同じ使用価値が、ある労働過程から生産物として出てきて、生産手段として他の労働過程にはいり込む（本訳書、第一巻、三一〇ページ参照）。生産過程においてある生産物

が労働手段として機能することだけが、その生産物を固定資本にする。これにたいして、生産物自身が過程から出てくるだけで、固定資本であるわけではない。たとえば機械は、機械製造業者の生産物または商品としては、彼の商品資本に属する。機械は、その買い手、すなわち、機械を生産的に使用する資本家の手にはいつてはじめて固定資本となる。

他の事情がすべて同じであれば、労働手段の固定性の程度は、その耐久性につれて増大する。すなわち、労働手段に固定された資本価値と、この価値の大きさのうち反復される労働過程において労働手段が生産物に引き渡す部分との差額の大きさは、その耐久性に依存する。この価値引き渡しが緩慢に行なわれれば行なわれるほど——そして、価値は同じ労働過程が反復されるたびに労働手段から引き渡される——、固定された資本はそれだけ大きくなり、生産過程で使用される資本と生産過程で消費される資本との差額はそれだけ大きくなる。この差額が消滅してしまったときには、労働手段は寿命が尽きてしまい、その使用価値とともにその価値を失ったのである。それは価値の担い手ではなくなった。労働手段は——不変資本の他の素材的担い手もすべてそうなのであるが——その使用価値とともにその価値を失う程度に応じて生産物に価値を引き渡すにすぎないから、労働手段の使用価値が失われるのが緩慢であればあるほど、それが生産過程で長もちすればするほど、それだけ不変資本価値が労働手段に固定されている期間が長くなるのは明らかである。

本来の意味での労働手段ではない生産手段、たとえば補助材料、原料、半製品などが、価値の引き渡しにかんして、それゆえその価値の流通様式にかんして、労働手段と同じ事情にあるとすれば、そ

(162)

の生産手段も同じく、固定資本の素材的な担い手であり、その実存形態である。いくつもの生産期間または幾年にもわたって作用する化学的諸成分を土地に使用する、すでに述べた土地改良の場合がそうである。この場合には、価値の一部分は生産物に引き渡され、それゆえ生産物とともに流通しているのに、他の価値部分は依然として、生産物とは別に自立的姿態で、すなわち固定資本の姿態で実存し続ける。この場合には、固定資本の一価値部分だけでなく、そのなかにこの価値部分が実存している実体である使用価値も、生産物にはいり込む。

根本的な誤り——固定資本および流動資本というカテゴリーと、不変資本および可変資本というカテゴリーとの混同——を別とすれば、経済学者たちに見られる従来の概念規定上の混乱は、なによりもまず次の諸点にもとづく——

労働諸手段に素材的にそなわっている一定の諸属性、たとえば、物理的不動性——家屋のそれのような——が、固定資本の直接的諸属性とされる。その場合、いつもたやすく指摘できることであるが、他の労働諸手段でそれ自体固定資本でありながら反対の属性、たとえば物理的可動性——船舶のそれのような——をもつものがある。

あるいはまた、価値の流通から生じる経済的な形態規定性が物的属性と混同される。すなわち、それ自体としては決して資本ではなく、一定の社会的諸関係のもとでのみ資本となる諸物が、それ自体として、かつ本来すでに固定資本または流動資本という一定の形態における資本でありうるかのように見られる。第一部、第五章で見たように（本訳書、第一巻、三〇三—三二二ページ参照）、生産諸手段は、

どのような社会的諸条件のもとで労働過程が行なわれるかにかかわりなく、あらゆる労働過程において、労働諸手段と労働対象とに分けられる。しかし両者は、資本主義的生産様式の内部ではじめて資本に、しかも前篇で規定されたような「生産資本」になるのである。それとともに、労働過程の本性にもとづく労働諸手段と労働対象との区別が、固定資本と流動資本との区別という新たな形態に反映される。このことによつてはじめて、労働手段として機能する物が、固定資本となる。その物が、その素材的諸属性によつて労働手段の機能以外の諸機能にも役立ちうるならば、その物はその機能の相違に応じて固定資本であつたりそうでなかつたりする。家畜は役畜としては固定資本である。肥育家畜（食肉用の）としては、結局のところ生産物として流通にはいる原料であり、したがつて、固定資本ではなく流動資本である。

(163)

ある生産手段が、反復して行なわれる労働過程内に——といっても、これら労働過程は互いに連続し、連続していて、それゆえ一生産期間を形づくっている（すなわち生産物を完成するのに必要な総生産時間をなしている）のであるが——比較的長く固定しているだけで、固定資本とまったく同様に、資本家は長かれ短かれの前貸しを余儀なくせられるが、しかしそのこと（単なる比較的長い固定）が彼の資本を固定資本にするのではない。たとえば、種子は固定資本ではなく、約一年間生産過程に固定されている原料にすぎない。すべての資本は、生産資本として機能するあいだは生産過程に固定されており、したがつてまた生産資本のすべての要素は、その素材的姿態、その機能、その価値の流通様式がどうであろうと、生産過程に固定されている。このように固定されていることは、生産